

第78回アブダクション研究会開催のご案内

アブダクション研究会

世話人 福永征夫
TEL & FAX 0774-65-5382
E-mail : jfdf117@ybb.ne.jp

事務局 岩下幸功
TEL&FAX 042-356-3810
E-mail : yiwashita@syncreate.jp

第78回アブダクション研究会の開催について、下記の通りご案内を申し上げます。

(1) 第77回アブダクション研究会のご報告をします

11・1・29に開催致しました前回の第77回アブダクション研究会は、尾上 彰 氏 に『<ゲーデル、エッシャー、バッハ> とアブダクション』 というテーマでご発表をいただき、音楽・絵画・数理の分野に等しく見識をお持ちの尾上彰先生から、アメリカのコンピュータ科学者ダグラス・R・ホフスタッターの「ゲーデル、エッシャー、バッハ」という、1985年に世に出た、20世紀の稀有なる名著の樞要な章について、解りやすいご案内とご説明をいただきました。

ホフスタッターの知識の宇宙から学べることは、今なお、余りにも多く、その有用な知見は、知識の最果てと深淵の広角度にして高深度の域に達しているように思われます。

一例を挙げるとすれば、25年も前の当時に、既に、ホフスタッターは、ゲノムの記号は、生体の化学の過程を含んではおらず、その引き金を担っているのだ、と説明していますが、世話人は最近、それと同型な知見を、現代の生化学者の表現に見出すことが出来ました。

ニック・レーンは、「生命の跳躍」(2010・みすず書房)の中で次のように述べています。

「今日のすべての生命は、代謝反応にも共通の核心となるものをもっている。それはクレブス回路(クエン酸回路)という小さな反応回路で、・・・」

「クレブス回路は遺伝子が[生みだした]のではなく、確率論的な化学と熱力学の現象なのである。その後に遺伝子が生まれると、それはすでにできあがっていた楽譜を指揮した。」

私たちは、これを切っ掛けにして、引き続き、ホフスタッターからの学びを繰り返して参りたいと存じています。

尾上彰先生とご出席の皆様にご心からお礼を申し上げます。

なお、尾上彰先生には、「ゲーデル、エッシャー、バッハに見る再帰的な構造と過程の同型性」という題目で、まとめの論稿を、1ヶ月半位の時間で、取りまとめをいただくようお願いを致しております。それが出来上がり次第、本案内状を差し替える形で、皆様にお届けしますので、何卒大いにご期待ください。

(2) 各界、各分野の皆様の積極的なご参加をお願いします

既存の領域的な知識をベースにして、新たな領域的な知識を探索し、それらを広域的な知識に組み換えて、より高次の領域的な知識を仮説形成的に創造することを目標に、アブダクション研究の飛躍を

期して参りますので、各界、各分野の皆様の積極的なご参加をお願いします。

(3) アブダクション研究会は、知識の広域化と高次化を目指し進化を続けて参ります
1996年に設立されたアブダクション研究会は、地球規模の難題に真正面から対処するために、知識の広域化と高次化を目指し、いつまでも、真摯に、勇気を持って、粘り強く、積極的に、可能性を追求し、多様な探究を積み重ねて、一步一步進化を続けて参ります。

(4) 発表をしてみたいテーマのご希望があれば、世話人宛に、積極的に申し出下さい
皆様には、今後に、ぜひとも発表をしてみたいテーマのご希望があれば、世話人宛に積極的に申し出をいただきたく、お願いを申し上げます。お申し出は、通年的にいつでも、お受け入れを致します。上記の方向に沿うものなら、いかなる領域に属するいかなるテーマであっても、将来の可能性として、誠意を持って相談をさせていただき、実現に向けて調整を果たす所存であります。

記

◇ 日 時： 2011年5月28日(土) 13:00~17:00(例会)
17:15~19:15(懇親会)

◇ 場 所： 日本電気企業年金会館 2階和室 (中山氏のお名前で申し込み)
東京都 世田谷区 代沢5丁目33-12 電話：03-3413-0111(代)

- * 当日の連絡先(岩下幸功・携帯電話) 070-5541-4742
- * 小田急線/京王・井の頭線 下北沢駅 下車 徒歩約8分
- * 会場の地図は、グループメールのブリーフケース内「下北沢 NEC 厚生年金基金会館MAP」に記載。 <http://groups.yahoo.co.jp/group/abduction/files/>

◇ テーマ：

「六十五年目の孵卵」(丸山健二)にみる
文学作品とアブダクション(仮題)

伏 見 親 子 氏
(愛国学園大学人間文化学部)

◆ 文 献 ◆

丸山健二著「百と八つの流れ星」上・下二巻(09・岩波書店)

◆テーマの資料 二六十五年目の孵卵 丸山 健二 (日経新聞2010・1・3) =

丸山 健二： 小説家。1943年長野県生まれ。67年「夏の流れ」で芥川賞。「千日の瑠璃」「争いの樹の下で」など著書多数。近作に「日と月と刀」「百と八つの流れ星」。

原稿用紙十枚による掌編小説、煩惱の数と同じ百八本を二冊分にまとめ、書き下ろしという形で発表してから、網目模様につながっている人間界とそれを取り巻く森羅万象とがいつそう鮮明な輝きを放って胸に迫ってくるようになった。時を同じくして、この世そのものがまさに文学の宝庫であるという当然の自覚がさらに深まることになり、私たち人間にとって言葉がいったい何を意図したものなのかを感得できる門口に佇(たたず)むことができたような、そんな境地に至った。

また、言語を唯一の頼みとする立場に身を置いているにもかかわらず、さながら音響芸術に携わっているかのごとき至高の気分ひたれるようにもなった。あえて複雑な思考を重ねなくとも、形而下と形而上の狭間をめまぐるしく行き来しなくとも、早朝に目を覚まし、ただ机を前にして座るだけで、わが心の内なる深きところから次々に紡ぎだされる文章のひとつひとつが妙なる楽の音を奏で、流れ星のごとき一瞬の光芒をきらめかせ、そのひと筋ひと筋がひとりで書き手自身を新たなる領域へといざない、高峰へと導いてくれる日々は、まさに夢のようだった。

そして正月も日曜日もいっさい関係がない、休日なしのぶっ通しの執筆が庭をいろどる植物たちと共に四季をめぐり抜けてゆくうちに、長年大切に温めつづけてきた卵がまたひとつ孵化した。驚くべきは書きだしてから速度で、優に一年以上を費やさなくてはならないだろうという予想と覚悟がみごとに裏切られ、千二百三十二枚という長編小説がわずか十ヶ月で完成したのだ。しかも、いつもの虚脱感に近い疲労感につつまれることがいっさいなく、存分に書いたという満足感だけがあとに残った。長い作家生活においても実に希有な印象だった。

四十代や五十代のときとはあきらかに異なって見える文学の宇宙へ、募る一方の創作意欲をまっしぐらに飛ばしつづけているうちに、小説家としてはきわめて望ましい方向へ歩を連れているという実感が六十代になってますます強まった。そうした自覚が魂のふところにかき抱く卵をひとつ残らず孵(かえ)させることが可能ではないかという自信を差し置き、生活のすべてをそのためだけにセッティングすることにまったく躊躇がなくなった。併せて、創作者や発見者の生涯における光輝の期間はほんの一瞬にすぎないという、むかしながらの言われ方がかならずしも正しいわけではなく、例外もあり得るという手応えを感じた。

その孵卵が六十五歳になるまで引き延ばされた最大の原因は、事実のあまりの重さと、悲劇のあまりの痛々しさによるものだろう。フィクションという形式に頼って生身の人間が暮らしている街に原子爆弾が投下されたという厳然たる過去を表現するには、よしんばそれが正面切った問題提起ではなく、あくまで物語の背景としての範疇にとどめおかれる現実の一部としてではあっても、果たしてそんなことをしているのかという疚(やま)しさを自覚しないわけにはゆかなかったからだ。だが、どこまでも事実即した記録としての意味合いを全面に押し出した戦争文学がたくさん生まれ、ほとんど出尽くした観が煮詰まったと思えたとき、私のなかで「機は熟した」という声か響きわたり、想像力と創作力がその翼をいっぱいひろげ、終戦前夜の日本の空を自在に飛び回り、光の言葉と雨の言葉を人間界にむけてたっぷり降り注いだ。

たしかに楽しみながら書き進められるような性質の小説ではなかったが、しかし、それでも過去のどの自作の場合にも得られなかった充足感を堪能し、精神の奥底に死蔵されていた宝物を発見したような喜びを味わうことができた。筆の勢いが凄まじく、制御するのにかなり苦労したものの、フィクションとノンフィクションの釣り合いはしっかりと保たれ、物語のほうがり負けしてしまうようなことにはならなかった。完成させたとき、いつもながらの脱稿の安堵感の代わりに、描き切ったにもかかわらず後ろ髪を引かれる思いに駆られ、いつまでもその世界を浮遊していたいという衝動がつづいた。

戦争という悲惨な事実を情緒でくんで提示し、語り継いでゆくだけでも十分に意義はあり、恒久平和を欲し、いつの日かそれを実現させるためには必要不可欠なことであろう。だが、花束と黙禱とてい涙と後悔を突き抜けたところに戦争の真因が厳然として存在することも忘れてはならない。つまり、加害者と被害者という単純な区分けは勧善懲悪の芝居や映画と同様に腑に落ちやすいのだが、だからといってその前でいつまでも佇んでいたのでは、人間最大の罪悪としての戦争の核心部分はまやかたままで、ために、同じ失敗を延々と繰り返す羽目になってしまう。

奇しくもあの忌まわしい年から数えて今年が六十五年目であることに気づいたとき、この春に出版するわが新作が一気に責任の重みを増した。

◇プログラム：

- | | | |
|---------------|----------------------|-------------|
| (1) 諸連絡： | | 13:00~13:10 |
| (2) 研究発表： | [PART-I] | 13:10~14:25 |
| | <小休止> | 14:25~14:30 |
| | [PART-II] | 14:30~15:45 |
| | <小休止> | 15:45~15:50 |
| (3) 総合的な質疑応答： | | 15:50~16:50 |
| (4) 諸連絡： | | 16:50~17:00 |
| (5) 懇親会： | <皆様の積極的なご参加を期待しています> | 17:15~19:15 |

第78回 アブダクション研究会 (5/28) の出欠連絡

●5/23 (月) までの返信にご協力下さい。ご連絡なしの当日出席も無論可ですが、会場や資料の準備の都合もありますので、できるだけ、ご協力くださるようお願いいたします。

FAX： 042-356-3810

E-mail： abduction-owner@yahoo.co.jp

岩下 幸功 行

●5/28 (土) の 研究会に、未定ですが 調 整 します。	●懇親会に、未定ですが 調 整 します。
出席	出席
欠 席	欠 席

ご署名 _____

☆ 出欠の連絡は、グループメールメニューの「投票」コーナーから行うこともできます。

<http://groups.yahoo.co.jp/group/abduction/polls>

* 次々回 2011 年7月度のアブダクション研究会は、2011 年7月30日 (土) 開催の予定で会場

確保の調整中です。

- * 7月度の研究会は、花村 嘉英 氏（中国・集美大学）に『エドワード・サピアの言語学とアブダクション』（仮題）のテーマで、ご発表をいただきます。
教科書は、エドワード・サピア著＝安藤訳『言語』（98・岩波書店）です。
- * 大いにご期待をいただき、奮ってご参加ください。

＜定例アンケート調査＞

もしご協力がいただければ、という趣旨であり、必須ではありません。
皆様のメッセージ集として他の会員にも伝達しますので、情報の交流に積極的に参画下さい。

- (1) 今、アブダクションの研究・実践と関連のある事項で特に興味をもって取り組んでおられること。
- (2) 研究会の議論の場を通してINTERSECTIONAL なアイデアや知見のINCUBATION が進んでおり、例会で発表したいと思っておられること。
- (3) これまで（第1回～第77回）の研究発表やなされた議論（「議事録」を参照下さい）に関して、さらに改めて質疑や意見を表明したいと考えておられること
- (4) アブダクションの観点から、注目すべき人・研究グループ・著書（古今東西不問）。
- (5) 細分化された「知」の再構築を図るという視点から、注目すべき人・研究グループ・著書（古今東西不問）。
- (6) 貴方ご自身がお考えになられている「知」の定義とは？
- (7) その他のご意見、ご要望、連絡事項など。
特に他学会・研究会での発表内容や発表論文等についても是非お知らせ下さい。

.....

.....

.....

.....

.....

.....